

滑稽雑談

下

特別

5

6326

20



滑稽雜談卷之二十目錄

十月部下

- 初 氷真使代綱 日 采漬登 二 夜興引
- 炭園 日 搦 日 火桶神橋 三 炭竈炭
- 日 茶品切 日 納豆汁 日 臨中 日 會食蒲團
- 六 紙袍 日 綿袍 六 衣類 日 葦飯
- 日 水香北香卷 日 鳧 七 鴨巻子鳴
- 七 浮寝の香 日 水臭 八 鱈河豚
- 五 華勝灸 下 海前海鳥腸 日 鱈 七 帰舟
- 日 枇杷茶 日 樞茶 日 宇茶茶
- 日 八子の巻 日 冬牡丹 日 松茶
- 八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 二十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 廿九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 三十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 四十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 五十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 六十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 七十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 八十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十一 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十二 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十三 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十四 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十五 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十六 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十七 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十八 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 九十九 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶
- 一百 冬牡丹 日 冬牡丹 日 松茶

廿一 春園麥刈

廿二 冬牡丹

日 名草枯

日 葉吾茶



滑稽雜談卷之第二

十月之部下

四時堂 其諺 編錄

○氷魚使

○延喜式

内膳

曰山城国近江国氷

魚網代各一處其氷魚始九月至十二月晦日貢之 ○按

山城國近江國に於て昔は此の地は氷魚を貢御すべしと云ふ事あり
傳ふに網代使を氷魚の使と云ふは氷魚の舟下中野郡に在り

○網代あらち

○藤原朝網代を之稱も九つあり初

て皇孫の網代使御すもや皇孫は皇孫も後あり ○又曰網代人
と云ふは網代といふ所を以て皇孫とて網代を以て皇孫とて網代人といふ也

○陸龜蒙漢具詠曰滬列竹干海滬曰滬吳之滬瀆是也

○指掌雜字曰魚箔潮來則魚入其中潮退則魚不復出

○和漢合運曰後宇多弘安九丙戌宇治橋傍五丈石塔

立為網代停止 私曰西大寺與正 ○昨後曰網代の漢稱の

具まわれば漢稱のふくたなるは昔代を以て月一は而して大内首が氷

魚を代へる罾は、魚の居る處を代へる罾は、代へる罾の心也

罾

罾

○罾

月影のそよ川は流るれあらず水寒のよもるくりり 罾
細代めよいさう罾のよもるくりり 罾
○詩經韓曰猗與漆沮潛有多魚注

潛潜也蓋積柴養魚使得藏隱避寒因以薄圍取之也

郭璞江賦曰洊澱為沚○揚升庵文集曰魚柝柝柝見

切說文柝以柴木壅水也江賦柝澱為沚夾滾羅整皆取

魚之具蜀中有魚柝之名○順和名曰介雅云罾蕪蔭反

摻謂之沚和名都郭璞曰積柴於水中魚得寒入其裏因

以薄圍捕取之○唐詩魚曰沚沚水也沚沚切沚沚沚沚沚沚

○和名曰介雅云罾蕪蔭反摻謂之沚和名都郭璞曰積柴於水中魚得寒入其裏因

以薄圍捕取之○唐詩魚曰沚沚水也沚沚切沚沚沚沚沚沚

○和名曰介雅云罾蕪蔭反摻謂之沚和名都郭璞曰積柴於水中魚得寒入其裏因

以薄圍捕取之○唐詩魚曰沚沚水也沚沚切沚沚沚沚沚沚

△罾 省

為器而承梁之空以取魚者也○莊子外曰罾者所以得

魚得魚而忘罾○江賦曰夾滾羅整○順和名曰野王按

罾和名捕魚竹筍也○仙舟舟為捕魚之具也

廣くまを結して川の形をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

魚の居る處をまをすを罾とす

之為飾 ○和信を以て炭を又飾るを好む人あり也又此句を好む者
若し又此句を好む者ありて一の念を以て好む者此句の意を以て好む者
云ふ一の念の丹は此句なり

新嘉

いふこといふをけりていふるは推して炭のゆくるとん 文後

△獸炭

○語林曰晋羊琇字稚舒景獻皇后從弟
性豪侈洛中少林木炭貴如粟琇乃搗小炭為屑以物和
之作獸形後何劭之徒共集乃以温酒火炙猛獸皆開口
向人赫々然諸豪貴皆效之 ○和信も和字より古くも和く

文後

和信人をもこのけりて和の字のいふなりして 左具

△炭斗

廣韻曰炭篋屬 ○和信の炭斗を和信の炭斗の字を以て和信の炭斗
也同字の和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗

和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗
和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗
和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗

和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗
和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗

和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗
和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗の字を以て和信の炭斗

子の字を以て

△炭圍

○和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍

和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍
和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍
和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍

△櫛

○揚升庵文集曰初寒擁炉欣而成詠因

戸當炭侯圍炉似故人胡桃無賜炭 宋世御炉
直學士 櫛杜有窮薪 ○說文曰杜斷也櫛杜短木也
和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍の字を以て和信の炭圍

無巾王莽頭禿乃始施巾之始也○時珍本州曰頭巾古以尺布裹頭為巾後世以紗羅布葛縫合方者曰巾山者帽加以漆製曰冠又束髮之帛曰巾覆髮之中曰幘單髮之絡曰網巾近制也○以後自巾の制無常一和信の月も載りて中糸の羽風と御衣の糸の羽風ありて製角乃布於帟於帟格格於布兜毛角毛の羽風ありて良防寒具之好也

○衾

○詩經曰抱衾與裯寔命不猶○身

章撮要曰被復衣也大被曰衾單被曰裯世人或以錦綉或以布素或以楮皮為之取其暖且適也○漢宮典職曰尚書郎入直供青綾白綾或錦被○順和名曰衾和名布須万

衾衾同衾衾多之衣之衣也後方也又曰古之衾也其衣也昔子之衾衾の心ありて之の衣なり也

万端

伎部比等乃班夫須万介和多佐使入奈模物妹者并許許作

△蒲團

あまのりも蒲團のありてあまのりもあまのりも

○傳灯錄曰菴牙禪師問翠微如何是祖師意翠微曰与我過禪板來翠微接得使打又問臨濟々々曰与我過蒲團來臨濟接得便打○馬一童蒲團詩曰剪取溪蒲密々編周遭巧撻團山石床闲展平如砥木榻半鋪暖似氈道院寂宜時佈席僧房足称夜安禅幾回独座忘言處一個天君自泰然○和名あまのり始て蒲布本綿より也四割のそと也蒲團乃用のそと也寒と御衣具ありてあまのりもあまのりもあまのりもあまのりも

○紙袍

○羅山詩集曰剛寄紙衣之詩灯前

裁筒將園兩地風霜喜共安錦繡楮衣吾一視只憐世上外邊寒○雍州府志曰紙子倭俗績白厚紙塗抹油日乾數遍尔後晴霄露宿則叁色兩手揉和之製衣服是称紙衣右便禦寒氣中古洛東清水坂人是製衿是云清水紙

子云素紙子又紀州根來土人以白紙不塗枿油者製衣之
是謂白紙子是不經女子之手而成故持律僧及南都東
大寺二月堂修法之僧徒著之好事俗士間著之○是亦の
況をあらふ御衣を來持戒持律の僧尼を佛の居士御衣の類也
是亦不也その御衣を御衣に用ひ也二月を會する御衣を今
俗風風の持律を好む御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
是亦或いは白紙御衣に用ひ也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

○綿袍 綿衣

○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

○綿衣之白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○毛吹布御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

萬 ちぬたの法々の御衣もあつては、
御衣は佛の居士御衣根來御衣也

○衣の類

○西條元十日の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

○華服

○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
○佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也

許(一) 佛舎白綿衣之長衣の御衣也其御衣は佛の居士御衣根來御衣也
御衣は佛の居士御衣根來御衣也

有与家鴨相似者有全别者其甚小者名刀鴨味最佳

順和名曰鴛音称一音施漢 ○大木の鳥目鴨のものと水之鴨との

あひかりの鳥カサ野鴨カサの鳥のうちに凡れ九ノ鳥の鳥よりはるる尾の鳥の一種

類カサ鳥の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種

海に居る鳥カサ在海に居る鳥カサ在海に居る鳥カサ在海に居る鳥カサ在海に居る鳥カサ

鳥の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種は黒鴨の一種

刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種

刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種

鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種は刀鴨の鳥の一種

首よりみゝわの鳥カサ首よりみゝわの鳥カサ首よりみゝわの鳥カサ首よりみゝわの鳥カサ

少鳥より大鳥の鳥の一種は少鳥より大鳥の鳥の一種は少鳥より大鳥の鳥の一種は少鳥より大鳥の鳥の一種

已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種

鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種

鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種は已の鳥の鳥の一種

○良安三才口會曰鳥種類太多矣頭頸深緑喉下白胸

紫有黒點腹毛灰白帶淡紫色有黒小斑背灰色有黒斑

翅蒼黒翹正黒翹上小羽深緑交白蒼背短啄紅掌果脚

者真鳥也其雌者淡黄赤色交蒼黒毛而作斑翅翹蒼黒

色蒼背短掌卑脚也諸鳥畿内之産为上尤列之産次之

輕鳥全體黒色頸後帶青有光眼上有淡白條背黒而

啄端淡赤腹淡赤白色而有黒縦紋一條脚掌俱赤其味

亦佳 尾長鳥木一名佐尾頭頸淡紫色眼邊至腹白色背灰

色帶碧而黒毛脇有淡赤白條背黒而兩邊青白色尾二

枚長二三寸許脚掌共黑其味亦佳 羽白鳧全體黑而
 兩脇白頭上有黑長毛如冠翅羽灰白嘴碧脚黑其味稍
 佳本草所謂冠鳧是乎 大明鳧似羽白鳧而大灰色翅
 微白頭赤嘴脚共黑 赤頭鳧俗稱緋鳥頭赤額有淡赤
 條背碧色帶赤兩脇白至腰皆碧脚蒼其味稍好 葦鳧
 頭背深灰色腹淡白翅間交青羽脚黃赤 蘆鳧頭灰色
 帶赤眼上有小黑條小白條頂上亦有胸間赤黑腹灰白
 背灰碧有白條赤黑條黑毛翅交青羽嘴脚俱黑其味最
 佳次于真鳧 口鳧頭頸青黑頸有白環紋背上至尾一
 條黑色翅有綠羽赤羽相雜兩眼赤腰白嘴黑脚赤能出
 沒于水數百成群相從迴泳轉泛故又名車鳧其味与羽
 白赤頭同 黑鳧狀類鳧而大其頭皆背共黑胸腹淡黑
 而鼻有瘤脚脰赤蹊翻本白末黑雌者全體灰色鼻瘤小
 羽脚色与雄同肉味有臭氣不佳

鵞音 沉鳧 又 劬音 按

鵞似鳧而小雄者頭頸紫色眼後有青色背蒼帶赤有花
 文兩眼碧有白條胸黃有赤黑點腹淡蒼兩腰白翅蒼交
 綠白黑羽嘴脚黑帶赤雌者淡黃淡赤雜黑色頭深灰色
 大抵其種類雌相似而雄者異也先鳧來後鳧飯晨成群
 高飛性能食泥及水草根其肉美味不減於真鳧 阿伊
 佐似鵞而頭背灰色腹正白嘴赤而尖脚亦赤 美古鳧
 似鵞而全體白色頭有碧黑冠毛嘴脚共黑 鈴鳧 一名
 黃黑 似鵞而全體黑色目边黃稍青兩脇淡白嘴碧脚黑帶
 黃其鳴声似鈴音 味鳧似鳧而小大於鵞頭青綠帶黃
 赤其嘴脚共黑翅灰色胸黃赤色有小黑点腹明白背灰
 白有赤黑毛數百群飛肉味類鵞雌者頭灰色全體灰白
 有小黑点

右十四品所載三才
會文石補入之

高山尔高部九波高尔余待公平待将出可闻 佐善傳

如鷹多黑斑有黃黑斑者有赤白交斑者又有胸腹灰赤
色交黑赤斑背純黑念光者皆能捉鳥鷺以下小鳥而鷲
鴻雁等者少矣 大和古事曰鷲...

○鷲...
○...
○...

○鷲子鳴

畝中得土堅曰如卵者輒取以賣破之當在其中無羽毛
候春始生羽破土而出 ○...
○...

背黃綠也... ...
○良安曰鶯和名出干和列奈良
為上信別奈良井之產次之形似目白鳥而肥鰲黑而黃
色腹灰白眼纖皆細尖而皆脚掌共灰黑色眉有三毛灰
白長二三分吻有三髭長四五分雌及未老者其毛短鳴
則搖尾冬月如日唧々似人舌鼓至立春始轉季春止其
声清亮口滑飛啼則急而長如日法華經或如日古計不
尺或如日月星日謂和州人畜鶯雜時教之以口笛竟
令轉三光而後又置雜於別處亦令習之今往々有芝蓋
鶯形色和漢大異也但立春始轉也声清亮也古今詩歌
稱美之者和漢不異也 以上三會
○...

て新りて其香のにおいむらさしと味新りて其味すそを煮ると味を
多てはくはくしむらさしの味いすや○本朝食鑑曰氷魚狀細少
不道一寸頭尾俱白如氷筋目黒如墨之點紙煮之如銀
線自秋末至冬初氷魚聚于奥梁魚籠回漢人擁攬網小
網而采之留籠者古之網代也笥籠之概謂網代木也古
者宇治田上川網代采之近世与川通之江海采之○太
の記もあつたといふ法記の記もあつたといふ

核を 日新の旨上川は法はれいあつたといふもあつたり
あま 若岡の旨の旨も法はれいあつたといふもあつたり

○鮫

味鹹無毒食之補氣腸与脂味尤佳生東北海○太
田口魚の旨の旨は法はれいあつたといふもあつたり
之旨の旨の旨は法はれいあつたといふもあつたり
之旨の旨の旨は法はれいあつたといふもあつたり

正字○今按之腸は魚の旨の旨は法はれいあつたといふもあつたり

補本朝食鑑曰雪
奥略類干鮫而大口細鱗大頭堅骨領下有細鬚而難見

頭中有白石二箇若棋子之小若蛤壳之碎端有鋸齒鱗
色青黃白久則淡白皮薄肉白鱗尾共軟味淡甘而為佳

珍也三越佐能及若丹但等州或奥羽海濱向北之處每
冬采之 一種在倍於介黨者色微黑帶白而形小味亦

不佳最為下品 鱈の旨の旨は法はれいあつたといふもあつたり

○河豚

○藏器本草曰河豚腹白背有赤道如
印目能用鬚觸物即嗔怒腹脹如氣毬浮起故人以物撩
而取之○時珍曰河豚一名鯪鯪一名嗔魚豚言其味美
也侯夷狀其形醜也北山經名鮆魚音沛今吳越最多狀

如蝌蚪大者尺餘背色青白有黃縷又無鱗無腮魚膽腹
 下白而不光率以三頭相從為一部彼人春月甚珍貴之
 尤重其腹腴呼為西施乳巖有翼藝苑雌黃云河豚水族
 之奇味世傳其殺久余守丹陽宣城見土人戶々食之但
 用菘菜薑蒿荻芽三物煮之亦未見死者南人言魚之無
 鱗無腮無膽有聲目能睚者皆有毒河豚備此數者故人
 畏之然有二種其色炎黑有文點者名斑魚毒最甚或云
 三月後則為斑魚不可食也陶覽云河豚魚雖小而獺及
 大魚不敢啖之則不惟毒入又能毒物也莫忌煤炆落中
 肝及子有大毒其子必不可食曾以水浸之一夜大如茨
 實世傳中其毒者以至金丹或橄欖及竜腦浸水皆可解
 ○五雜俎曰一云烹時用傘遮蓋塵墜其中則殺入○三
 才口會曰鯽一名噴魚今之河豚其出有時以冬至後來
 ○東坡詩曰粉紅石首仍無骨白雪河豚不藥人○梅聖

俞詩曰炮煎苟失所入喉為鏝鉏○順和名曰鯪鯪候怡二音

和名布久一云布久因 ○多哉篇曰河豚布久 ○和創魚解曰在るる

るの里をば美紀之時にわが河豚の腹はくその毒く ○古わが河豚凡魚は

まては河豚を好むは只河豚の目とてわが河豚はくその毒く ○古わが河豚凡魚は

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

より人信るる毒もわが河豚の肝及びその毒を啖て毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

△後之翹

○時珍曰翹魚外々有之形似河豚

而小背青有斑紋無鱗尾不岐腹白有刺戟人手亦善瞋

々則腹脹大口緊如泡仰浮水面味甘平無毒○按わが河

豚は河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

あり ○按わが河豚の毒は世に毒を考へても不毒人感毒殺るる子人

部子能食其... 其味以異于他也又食之拳家皆死者予亦見之 脍暫時
口味賭身命矣与密姪者趣一也
○寧波府志曰華臙魚一名老婆魚
一名緞魚蓋其腹有帶如帔子生附其上故名緞魚其形
如科斗而大者如盤吳都賦曰琵琶魚無鱗形似琵琶冬

○鮫鱧

初出者俗多重之至春則味降矣 ○古語曰花柳魚信鮫
鱧之好也東人好之思之可為毒杯也鮫鱧也 鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也 鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也

好之思也東人好之思之可為毒杯也 鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也 鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也
○鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也 鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也 鮫鱧之好也東人好之思之可為毒杯也
本朝食監曰江東多有之就中駿豆相總取多自冬初至
春未采之笈秋不至其狀平團如盤肉厚肚大背黑腹白
眼鼻向上口濶大而長斯魚皮肉鬚骨腸膽皆可食腸膽
色黃味亦窳美煮則膽色赤黃惟胃子頭不食儿割鮫鱧
法庖人秘之妾不傳授呼曰鈎切其法以繩貫下唇懸于
橫梁大抄汲水自口投胃者可五六升待其水自口溢外
而止先割尽兩邊鬚及周身之肉後采膽割腸斷骨而以
刀刺胃則水迸出急洗庖刀去若不知此法妾割鮫鱧則

肉著皮骨腸膽破壞不足用故庖人秘之

○海鼠

○舊事本紀卷六天孫降臨時下曰猿田

彦大神奉送天孫於筑紫日向高千穗檣觸峯爰送猿田
彦神而還到乃悉追聚鱗廣物鱗狹物以問言汝者天孫
御子仕奉耶之時余諸莫皆仕奉白之中海鼠不自尔天
鈿賣命謂海鼠云此口不吞之口而以細小刀抑其口故
於今海鼠口折是也○文選郭璞江賦曰其水物怪錯則
有至土肉石花注土肉正黑如小兒臂大長五寸中有腹
無口目有三十足炙食○時珍食物本草注曰海參生東
南海中共形如蠶大色黑多瘰癧一種長五六寸者表裏
俱潔味極美鮮也切擅補益殺品中之最珍貴者也今北
人又有以駝皮及駝馬之陰莖贗○五雜俎曰海參温補
足歎人參故曰海參遼東海濱有之一名海男子其形如
男子勢然淡菜之對也○順和名曰禹錫食經云海鼠名和

古本朝式如整字云伊里古似輕而大者也○多試篇曰土肉余見文選郭璞

江賦注土肉者蓋我邦自古所謂海鼠者耶本草綱目所載海燕亦虫形相似而是別一種也綱目封下亦載土肉

也○和訓海鼠曰和訓海鼠曰或曰土肉或曰土肉○或

曰寬文卷のむ村上御書と云々陳元寶と云々同云土肉曰かの海鼠名贊

鼠江東産尤多尾之和田參之柵嶋相之三浦武之金沢

本木也海西又多采就中小豆嶋最多矣狀似鼠無頭尾

手足但有前後兩口長五六寸而口肥其色蒼黑或帶黃

亦背曰腹平背多瘡癩而軟在兩腋者若足而蠢跋來往

膜皮青碧如小瘡癩而軟一種有長二三寸腹内多沙味

亦稍短者一種有長七八寸肥大者○むらさき肉

あはれおのむらさきの口今も海へ出さるるは多し

既にかきつゝはれり

○歸也

○日本紀二十曰履中天皇三年冬十一月丙寅朔辛未天皇泛兩枝船于磐余市磯池与皇妃各分乘而遊宴膳臣余磯献酒時梅花落干御蓋天皇異之則召物部長真膽連詔之曰是花也非時而來其何処之花矣汝自可求於是長真膽連独尋花獲于掖上室山而献之天皇歡其希有即為宮名故謂磐余稚桜宮其此之緣也是日改長真膽連之本姓曰稚桜部造又号膳臣余磯曰稚桜部臣○東坡詩注曰桃李冬花及金石上生花皆曰狂花○李子蒲室疏曰褪花師說云阿馱波奈又云加倍利波奈○
和信のそりしはの狂花也 多於の如きとて之り印と好を中如き物也
 又褪のそりしはの狂花也 多於の如きとて之り印と好を中如き物也

○枇杷花

長葉大如駢耳背有黃毛陰密婆々可愛四時不凋盛冬
 ○蕙頌口經曰枇杷木高丈餘肥枝

開白花至三四月成實○時珍曰楊万里詩曰大葉聳長耳一枝堪滿盤荔枝分与核金橘却無酸頗盡其狀和 考の志百後のふくし和のふくし十月の都のあり

十月の都のあり 考の志百後のふくし和のふくし十月の都のあり

○榧花 而北者實冬月開黃白花○和の志百後のふくし 考の志百後のふくし

○山茶花 焦氏類林曰海紅即淺紅山茶而

差小自十二月開至二月与梅同時一名茶梅○三才口會曰茶梅有白与紅粉二種子出者單葉用接開十一月中花如鵝眼錢○考の志百後のふくし 考の志百後のふくし

山茶のふくし 考の志百後のふくし

ハ海紅のふくし

花実与海石榴同而小共葉如茶葉其實山長形如梨而

有微毛可小梅大老則裂中有核三四顆榨油多於海石

榴凡種子者必不佳可接枝凡山茶花冬為盛海石榴花

春為盛遠三列右山茶花大木

○久咳椿 早咳椿 三才口會曰山茶有數種一種

有如磬口而粉紅者十月開浙之温郡有白宝珠九月開

花香清可嗅有蜀花下面一層有盤揚妃有宝珠單葉二

種淺深二色○考の志百後のふくし 考の志百後のふくし

考の志百後のふくし 考の志百後のふくし

可接計此と年の海茶を接する日数は次を以て十月開

果は接するに十月も海茶の接する日数は次を以て十月開

の接するに十月も海茶の接する日数は次を以て十月開

○ハハハ

○漢名未知

○大和名曰...

乃其形甚麻のやみ... 乃其形も似たり... 乃其形も似たり... 乃其形も似たり... 乃其形も似たり...

○茶花

○蘓頌曰經曰茶木如瓜蘆葉如拖子

花如白薔薇實如拼桐華如丁香根如胡桃其上者生爛石中者生礫壤下者生黃土

○栲

○時珍本草曰栲骨葉有五刺如猫之

形故名猫兒刺四時不凋五月開細白花

栲の心 ○今多し物骨に信云栲也栲の字... 帝大宝二年獻杠谷樹長八尋云云是等以為希有之物 其葉四時不凋厚硬有五稜如刺有雌雄其柔者為雌九月開小花碎白色結實小青色五月熟黑色似鼠李女貞之輩而大如小蓮子

○茶

○世に於て...

○落葉 紅葉

○詩經凡幽日十月隕穽注隕墜穽落

也謂草木隕落也 ○陸機賦日鳴枯條之冷々飛落葉之

漠々 ○連句新或日落葉言一松の落葉一落葉由是月ゆく柳らふと

一松一葉らうとも下り松の落葉難く柳の落葉たると多かるく之を九柳

らうも落葉の内也落葉多かり松の落葉皆然く柳の落葉は ○古今集白木の

葉らふ落葉多かるく之を云ふの事と落葉は松の柳の落葉難く之れも亦の

事なり秋の紅葉を言ふは秋のちりて柳を言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて

柳の御み葉のちりとも秋の ○作後白木の事多かるく之を言ふは秋の紅葉を

も秋のちりて言ふと後とも之を言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて

万九 十月之具孔の常可吾甘子我屋戸乃黄葉不可落葉見少納言

△木を言ふ ○白氏文集夕望樓詩日風吹枯木暗

天雨 ○朗詠集落源順神泉苑賦落葉序日梧楸影中一

声雨空灑 ○連句新或日木を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

も秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

も秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

も秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

△川紅葉

秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

も秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

も秋のちりて言ふは秋の紅葉を言ふは秋のちりて言ふは秋の紅葉を

○牡丹 ○花上集九淵冬牡丹詩日魏紫冬閑

亦化工衆人愛敢与春同三郎若不厭寒素定有返魂尋

此叢 ○覆醬集雪中見牡丹花詩日自先臘梅花葉生芳

顏妖態便入驚一枝濃艷啣霜雪想見精神似子卿○大
和事自今又見牡丹於十月より花噴臘寒の時より凡
めばうら人即ちて天地造化の力を信じて成る良の可怪く 牡丹の
ありて花軍と申すれども平様はし冬日牡丹の古詩をたへて

○寒菊

○寫信の信同之菊もあもむもたの菊り仰
十月の菊むと用く梅の菊むとむに時ひく故書も信り系取る
好まむあひあてん信り ○太わちま回み菊もを菊と云事行
味其ふ菊をの少菊あふて秋の信をんあり ○按し牡丹を菊
とて信菊とてや在る異あてとありて存他菊もや

菊の菊もあひあてん信り 以て信り牡丹の菊もあひあてん信り
秋の菊もあひあてん信り 秋の菊もあひあてん信り
和事自今又見牡丹 和事自今又見牡丹

○棠五朵花

頌口經曰歎冬又有紅花者葉如荷而斗直大者客一升

○本草綱目

歎冬、日一名棠吾云 ○蕪

小者容教合俗呼為蜂斗葉又名水斗葉則蕪茶所謂大
如葵而叢生者是也 ○急就章曰棠吾似歎冬而腹有絲
生陸地花黃色 ○太わちま回棠吾蓋を歎冬と云り歎冬もも
原秋葉也と云く冬はも棠吾とて一考を蕪茶ありと云くを食もあ
味也歎冬一切の毒を消し牡丹魚毒を殺すは豚の毒も能解をし歎冬
とし信也編み求日急就章曰棠吾也は信り人としを棠吾とて異名
とし棠吾と稱し信も歎冬と云也 ○按し信石落の二考と用事條 ○
榎良安曰雀禹錫食經歎冬、和名也 據此則歎冬、即山落
豆和、至冬葉不凋落本草二物不分別然所圖落也棠豆
和即歎冬而落之一種莖葉形狀相似而花大異莖灰紫
無溝脆葉厚硬深青光沢冬亦不凋秋抽莖作朶二三尺
如菊花萼用草正黃有紫抹莖葉燻淘去苦汁為蔬其葉
解奠毒中河豚毒者生噉之屢有効又飼馬良不劣於薊
葛之葉也九州人今亦每為蔬菜食之 ○太加良古 在山中葉

似落而花似豆和
三月開花

○蒼而麥刈

○時珍本草曰蒼麥一名蔽麥莖弱

而翹然易長易收磨麪如麥故曰蒼曰莖而與麥同名也
立秋前後下種八九月收刈性最畏霜苗高一二尺赤莖
綠葉如烏柏樹葉開小白花繁密繁々然結實累累如羊
蹄實有三稜老則烏黑色○順和名曰蒼麥和名曾波牟
收一云久呂
無○古和名同凡蒼麥夏穀既終三秋前後下種九月既實
のり十月收刈してはふまを裁刈して一年之度穀類を収る也○按
は毛喰る同十月蒼麥刈は八月すかた年の御事ともありし新書も
と云はれし化を云新書もと秋のうちにその國東より八月より其の
五つてうの蒼麥と云ふ言の之也焙乾し掛或は揉むるも火で揚て乾し
麪も度て煮るも好む秋は御成納りの蒼麥と收刈るは其の傳也新書も
八月には

○麥詩

○齊民要術曰聖人於五穀重麥亦

也○典籍便覽曰麥比他穀隔歲種故云麥秋種冬長春
秀夏實備四時之氣凡穀新舊不接時麥實先熟民食接
續所賴甚重故春秋獨書無麥○按は古の麥も秋種と云ふ
和名も亦在月種と播り少許の他は古と無れ秋月種は通例なり○
禰良安曰日本後紀曰稱徳帝大臣吉備奉勅宣麥者經
絶救乏穀之寂良令天下百姓種大小麥而雖耕種或失
其時嵯峨帝弘仁十一年藤原冬嗣奉勅自今以後用八
月令播種不得失時也云云按大麥有數種而早者九十
月下種晚者十一月下種皆四月黃熟其刈也從立春至
百二十日為旬故諺曰麥百日中可蒔三日中可刈也小
麥種類多而亦有早中晚之異凡下種十月為準與大麥
同時其黃熟遲於大麥十日許

○名草拈

○御筆同巻より糸の拈らるるもの名をこの

字をあらわしむるに於ては拈字の字をあらわすは又目あり拈字
の字をあらわすも又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
拈字の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
拈字の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
拈字の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
拈字の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
拈字の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
拈字の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字

玉葉玉葉

玉葉の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字

玉葉玉葉

玉葉の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字

玉葉の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
玉葉の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
玉葉の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字
玉葉の字をあらわすは又目あり拈字の字をあらわすは又目あり拈字

